
 巻頭言

過当販売競争

牧 本 利 夫*

少し前のことであるが、幼稚園に通っている女の子が“学校に入学するとき、これを買ってもらおうの”と言って見せてくれたのが、ミッキーマウスの模様入り電卓の広告の切り抜きであった。子供の雑誌に大段的に宣伝しているこの電卓は、少なくとも幼稚園児には余り関係はなさそうである。もっともマンガのついたオモチャとして見るならば別である。聞いてみると、例によってTVのコマーシャルが園児の“決心”をかりたてた端緒となったようである。カッコのよい15秒のコマーシャルの魅力が、度重なって園児をとりこにした結果である。15秒スポットの放送料（電波料）45万円を払って、しかも“公共性”の強いと公認されている電波を使って、毎日大段的に宣伝している例は枚挙に暇がないことは、今日では誰でも知っていることであり、これが余りにも不思議でなくなってきた時代ではある。

子供、幼児への乱売宣伝合戦は、少なくとも今年は見られないと弁明する向きもあるが、この種の電卓は、子供のオモチャなのか、学用品なのかと考えさせられる。子供の電卓はオモチャでレジャーで、勉強とは別であると主張し、数学はきらいだが、オモチャとして魅力を感じる子供がいると言う人もいる。いや電卓で遊ぶ子供は数学（数字）が好きな子供であると言いきる人もいる。何れが正しいのか、子供の心理と教育効果の調査をまたねばならないと思う。しかし子供時代から電卓のような文明の利器に慣れ親しんでいることは大変に結構なことであり、文明時代にふさわしい生活ができることになる。老人とはちがって子供の若い順応性はただちに電卓を使

いこなすことができるであろう。

電卓は電子工業に関係している先輩、同僚の研究開発と生産化の成果として、その功績は高く評価されなければならない。幼稚園児にまでその存在と価値を認識(?)させてきた努力には感服せざるをえない。過当販売合戦と生産競争によって、追いつめられたという現実はあるかも知れないが、その結果として、今日のように安価に文明の利器が愛用できるようになってきたとも言われる。科学計算用の電卓やミリコンもそのお蔭で誠に容易に手軽に活用できるようになってきたことも事実であろう。感謝しなければならない現象かも知れない。

文明の利器は研究と開発に基づいて企業の決意と努力による偉大なる産物であり、これに関係された人々の社会への大きな貢献である。しかし利器の開発と“たくましき商魂”とは別ではなからうか。高度成長時代には、あらゆる新規性が喜ばれ人々を魅了してくれたし、人々はそれらをすべて受け入れることができた。新しい製品の発売と購入、しかもその旺盛な消費こそが、成長社会のシンボルであると高く推奨されてきた。しかし今後の安定成長時代においては、様相は一変していくであろう。企画も開発も変革を示さなければならぬであろう。

技術の開発は単に社会の要求、欲望のみに対応し、さらにそれらを煽動して行うものであってはならない。有限の資源とエネルギーに制約され、人類の未来永劫の繁栄を享受することを目標として、長期的な展望の下に技術の開発は行われなければならない。短期的な展望のみを考慮して対応することは短期的に破端を生ずることを予期しなければならない。

* 牧本利夫 (Toshio Makimoto), 大阪大学, 電気工学科, 教授, 工学博士, 電気回路学